



- ◇地域づくりとエコノミー 野口隆(理事/奈良学園大学特別客員教授)……1頁
- ◇私の地域づくり 神剛司(理事/地域P&C第3期生/地域P&C養成塾塾頭)……2頁
- ◇今井の約束 辻元亨介(第15期地域P&C養成塾塾生)……5頁

地域づくりとエコノミー

野口隆(理事/奈良学園大学特別客員教授)

1. なぜ、経済か

地域づくり活動に関わっている人に「なぜ活動するのか、活動の目的は？」と尋ねると、「地域が好きだから」「地域の良さを多くの人に知ってほしい」「地域を元気にしたい」などの返事が返ってくる。けれども「地域で儲けたい」と露骨に言う人は少ない。

しかし、地域づくりの活動をするには、手弁当でやってもいろいろな経費は発生するので、お金は必要である。さらに活動を何年も持続していくには、活動から何らかの利益が得られることが必要不可欠である。地域活動を続けていくには経済的視点も欠かせない。

2. 地域経済の考え方

地域経済を考える時、一国の輸出・輸入を考えるとわかりやすい。地域(それは、集落だったり、市町村であったり、もっと広いエリアであっても良いが)から外のエリアにモノやサービスが出ていく(売る)ことを移出、その逆を移入と言う。

かつては、移出に頑張ることが奨励された。移出の先は、隣村から近畿、全国、世界に広がるのだから可能性は大きく、当然であるとも言えよう。しかし、地域内の取引、地域でものを買ってもらうことも極めて重要である。

例えば、企業誘致に成功し、エレクトロクス企業の下請け企業が地域内に立地した場合、大成功と喜ばれるが、このような企業の場合、原材料はほとんど他地域で作られた部品であることが多い。地域内に落とされるお金はワーカーの給料や雑資材ぐらいである。また、このような企業は親会社の意向次第で、アジアなどに移転しているケースも多い。

一方、地域の野菜を使った加工食品は、材料も人件費も地域内へ支払われることが多く、地域内でお金が回るケースが多い。また、これが外部の村や町へ売れば、外からのお金が入ってきて、それが地域内で回ることになる。

3. 漏れバケツ

このように、お金が地域で循環することを重視した考え方は、枝廣淳子氏の『地元経済を創りなおす』(岩波新書)に詳しい。同氏は、外からお金が入ってきても、すぐに外部へ漏れ出ていく地域の経済を穴の開いたバケツ「漏れバケツ」に譬えて説明している。

例えば、いったん地域に入ってきたお金100円が、最終的にその地域から出ていく前に何回その地域で使われるかを比較すると、地域内消費80%の場合、 $100 \rightarrow 80 \rightarrow 64 \rightarrow 51 \rightarrow 40$ と回っていき、最終的に244円のお金が使われることになる。

一方、地域内消費15%の場合、 $100 \rightarrow 15 \rightarrow 2.25 \rightarrow 0.3$ となり、合計しても118円にしかならない。このような考え

方を「地域内乗数効果」と呼んでいる。

地域の小売店や小工場が商品や材料を仕入れる時、安いからと言って、他地域から商品を仕入れることが、必ずしも正解とは言いがたいことを説明している。地域にコンビニができた喜んでると、利益も仕入れも外部に出ていくことになり、複雑な思いがある。

4. 地域づくりとエコノミーの事例

このような地域の作物や商品、資源を有効に使うことで地域内の経済循環を高めた例として、前述の本では、島の民宿の敷布や枕カバーの洗濯を島外に出していたのを、島内でクリーニング屋を開業して、島外の需要までまかなうようになった例(島根県海士町)や、学校給食で使う野菜を町内の農家から仕入れるようになった富山県入善農業公社など多数の事例が紹介されている。

奈良県でも、例えば、筆者も訪問する上北山村では、地元の若い主婦やお母さんたちが中心となって活動する地域活動団体「がんばろらえ」(村の方言で頑張ろうの意)が、地域のおばあさんが裏の畑で作っている野菜を集荷し、月に数回、村の中心部の道の駅で販売している。

おばあさん達は、これまで自家用のために畑をしていたが、多くの野菜はとれすぎて、近所の人に差し上げていたが、それも限界だった。そういう状況の中、野菜を集荷してもらい、販売してからは、村の人や外部の旅行者、通行者にどんどん売れて、「人々に喜ばれ、その上、お金も入り」と、とても喜び、元気が出てきたと言う。村人のお金と外部の人のお金が村内で回る仕組みが新たにできたことになる。

この他、「がんばろらえ」は、年数回、村内でマルシェを開いており(現在はコロナ禍で中断している)、人気を博している。

奈良フェニックス大学でも講義があった、山城で有名な高取町では、地域の老人達が協力して、民家の玄関やお店の中に各家のお雛さまを1ヶ月の間、飾ってもらい、都会の老若の女性が3万~4万人も訪れる「町家のひなめぐり」を開催しているが、十数年の努力の結果、当初の目的である町のお年寄りを元気にし、町の経済を元気にするという2大目標を達成している。

「経済を元気に」という点では、町の中に新たに20軒の新しいお店が生まれている。また、新しくできた地域経営の大きなレストランが町の農産物を活用しているのを始め地域の経済が回り始めている。

「お年寄りを元気に」では、訪問者との間にお雛様を巡った交流が芽生え、老人達は「3月がずっと続いたら良いのに」と言うほどの生きがいとなっている。また訪問者も「町の人の優しさに触れた」と感動している。

以上、地域の経済を考えるひとつの見方「漏れバケツ論」を中心にして事例を見てきた。これ以外の方法については、また、機会を見て紹介したい。

私の地域づくり

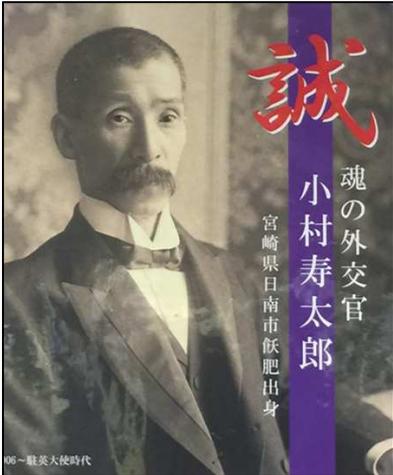
神剛司(理事/地域P&C 第3期生/地域P&C 養成塾塾頭)

あなたのお仕事は何ですか。それとも、もう引退されてしっかりと地域づくり活動に専念されていますか。私は、まだ仕事をしています。それは「博物館の展示づくり」の仕事です。意外かも知れませんが、この仕事を通じて私は地域づくりに関わっています。と言っても、あまりピンとこないかもしれません。この仕事はたとえるなら、『ラブレターの代筆屋』のようだと思っています。もっともSNSが浸透した昨今、人はラブレターなどというものを書くものなのか、その辺りの事情にめっきり疎くなってしまっている私ですが。

相手に自分の想いが伝わるように綴るラブレター。どう書けば、Aさんは心を開き、Bさんの気持ちを受け入れ

てくれるのか。代筆屋は二人を観察し、その表現を極めます。そして心揺らすラブレターで、AさんがBさんを受け入れ、その恋が成就すれば、ミッション終了となります。

それは博物館の展示に似ていると思っています。想いを伝える仕事だからです。ラブレターならぬ展示を通して、人物や出来事に光を当て、今の地域とのつながりを明らかにして、歴史・文化の価値を来館者に伝え、未来に継承し、地域を元気にするきっかけをつくります。



最近の事例をご紹介します。これは宮崎県日南市飢肥(おび)にある小村寿太郎記念館です。私は、展示リニューアルの企画担当として関わりました。飢肥は、大名伊東氏が治めた飢肥藩の城下町です。飢肥藩は4万石という小藩でありながら、領土拡張をねらう60万石の大藩である薩摩藩の北にあり、蓋を塞ぐような位置であったことから、両藩は小競り合いを繰り返します。小藩であった飢肥藩は、その分、人材育成を重視し、他藩に比べ教育熱心な藩風があり、小村寿太郎は幕末のそのような環境で様々な人物と交流して育ちました。

小村寿太郎は、日露戦争を終結させたポーツマス講和条約の立役者であったことは、ご存知だと思います。

地元には、寿太郎の幼少期の様々なエピソードが伝わっています。病弱な母親に代わり、寿太郎を教育した祖母はよく歴史上人物について話して聞かせていたこと。武士の家系であった寿太郎が武士だけでなく近所の農民、商人の子どもたちとも仲良く遊んだこと。仕事で日本各地を飛び回る父親の話聞くのがとても好きだったこと。寿太郎を人間として大きく飛躍させた恩師がいたことなど。

さて、一言で展示と言っても、その表現は、実物資料、解説文、写真、模型、映像、音響、そしてこれらを複合的に用いた手法など多種多様ですが、ここでは、映像についてお話をしたいと思います。私はここ小村寿太郎記念館で、市民と一緒に展示をつくらうと考えました。市民が参加することで、あらためて地域の偉人、歴史を見直す機会を提供できるからであり、映像化されることで、今後15年以上は上映され、市民に長く愛される博物館になるきっかけとなるからです。NHKの番組構成のような大局的な視点では

なく、地元の飢肥ならではのローカルな視点で、しかもできるだけ多くの市民に実際に参加してもらい、短編映像を制作することにしました。

ところが、私たちが進めた市民協働による映像づくりは、いきなり暗礁に乗り上げます。セオリー通り、市の広報誌で募集したのですが、予想以上に反響がなく、参加希望者はたった2名と聞き、私たちは青くなりました。これはいかんと言うことで、市の担当部局のみなさん、地域の神社の神職、小学校・高校の校長先生、休眠中の市民劇団関係者、地域づくり団体など思いつく相手に片っ端から出演依頼をすることにしました。その結果、この捨て身の行動が功を奏してか、何とか最終的には100名を超える参加者を集め切ることができました。面白いもので、直にお会いして、熱く趣旨を伝えると、無報酬にもかかわらず、皆さんは二つ返事で快く承諾してくれました。きっと、あなたもご経験がおありでしょう。後がないプレゼンにはきっと気迫が籠るのでしょいか。この辺りは、一般的な地域づくり活動にも通じることでしょいか。

こうして始まった映像づくりは季節感を出すために、10月と12月に分け、それぞれ3日間ずつ、地元での撮影が行われました。小学校、高校で生徒に出演してもらう場面は、授業の合間を縫っての分刻みの撮影になります。



こういう場合、映像を専門に制作する映像プロダクションを従えて行いますので、撮影や編集などの実務は任せられますが、市のご担当者、市民との交渉、調整は、基本、私たちが進めることになります。つまり、とても手間暇がかかるのです。しかしここをきちんとしないと、うまくいくものも、いかなくなります。良いものをつくらうとするなら、見えない部分で頑張らないといけません。



撮影前に役者、着付け、メイクなどボランティアが大集合をして、分刻みの香盤表を見ながら、段取りを再確認します。寺子屋の子どもたちの衣装は、地元の着物を広める市民団体の協力を得ました。武士の衣装は、お城祭りの仮装の衣装をお持ちの市民団体からお借りました。

ところが、西南戦争での戦闘シーンがあまりに激し過ぎて、お借りした衣装がアチコチ、ビリビリに破れてしまい、元通りに補修してご返却することになってしまいました。こういうアクシデントは、どこでも起こりうることで、それを前提にした余裕のある計画をしておく必要があります。



右の写真は西南戦争で敗退する飢肥隊の隊員を演ずる市民メンバーに血のりや汚しをメイクするボランティアです。中腰になりながら、とても楽しそうに一生懸命されていた姿が印象的でした。大勢の市民が一緒になって何かをつくりあげるという作業に、映像づくりは適しているとあらためて思いました。



この度の市民協働による映像づくりで実はこだわったのは本編映像の後に続けて、メイキング映像をしっかりと挿入することでした。撮影現場にそれぞれに扮した市民のみなさんや裏方のみなさんを全員登場させた映像です。後日、着付けで協力していただいた年配の女性から「孫に自慢できて嬉しいです」とご感想をいただきました。もちろんエンドロールには、関わった皆さんの名前を入れて流しました。



市民協働による映像づくりと言っても、当然限界はあります。映像の質を考えればすべてが市民だけでできるわけではありません。今回、実際には子役も含め主要な役柄として3名のプロの俳優に関わってもらい、きっちりと締めてもらいました。左の写真は、プロの子役と市民(神職)の恩師役の場面です。何ら遜色のない、メリハリがきいた映像ができたと思っています。

最後になりますが、小村寿太郎は厳しい状況下、何とかポーツマス講和条約を締結し、日露戦争を終わらせ、日本に帰ります。しかし、国内では戦争で肉親を失い、疲弊仕切った国民から、なぜロシアから賠償金が取れなかったと不満の声が噴出し、日比谷事件のような暴動すら起こる状況でした。後日、国民もわかりますが、日露戦争で国力が底をついていた日本として最高の条件での条約締結でした。

地元飴肥に里帰りした寿太郎は、温かく飴肥の人々に迎えられます。そして、地元の宮崎中学校に招かれ、全校生を前に挨拶をします。これは短いスピーチ、一分訓話として有名です。映像でも、ここがハイライトのシーンです。

寿太郎はゆっくりと語り出します。「諸君は、正直であれ。正直であるということは、何よりも大切である」

あなたはどう思われましたか。外交官として、熾烈な腹の探り合いの連続であろう国際的な交渉ごとの場を経験してきた寿太郎が、ふるさとの子どもたちに最も伝えなかった言葉がこれだったということに、私は震えるほど感動しました。これがこの国に生まれ、この仕事をしてきた良かったと私が思う瞬間です。

私たちは地域の、とくに子どもたちの心に感動を呼ぶ『ラブレター』を綴ることはできたでしょうか。自分のふるさとに誇りをもってもらったでしょうか。10年後、20年後を楽しみにしたいと思います。

私は特定の場所での地域づくりはしていません。しかし、博物館の展示づくりを通じて、地域の人々が郷土への愛着を深める活動をしています。それが地域住民の意識を高め、地域の活性化に主体的に関わる人を育てていると自負しています。これが私なりの地域づくり活動だと思っています。

今井の約束

辻元亨介(第15期地域P&C 養成塾塾生)

2022年8月、地域プランナー・コーディネータ養成塾で合宿が行われた。15期生である私は、事前準備から参加し、3日間にわたり多くの経験をさせて頂いた。合宿を通して私は、今後の自分の目標及び課題点を見つけた。自分の意見を積極的に発信すること、地域と良好な関係を築くには傍観者ではなく当事者として行動することである。そのような考えに至った経緯を、合宿での経験を振り返りながらまとめていく。

8月5日に行われた事前準備において、私は、地域P&C 養成塾塾長の若林さんや倉敷町家トラストのお二人とともに、町に設置する行灯の組み立てを行い、四方に張り付ける習字を書いた。私が書かせていただいた文字は、「ヘルツに火を灯せ」「大声」の2種類である。

ヘルツは、ドイツ語で心を表す単語 *das Herz* のことである。当初はすべて日本語で書こうとしたのだが、若林さんからの助言で私がかつて学んでいたドイツ語を用いることにした。そうすることで、私という個人が参加したことの証明になるのだと。

「大声」というのは、私の声量が小さいことについて若林さんから指摘を受けたことがきっかけである。私は幼少期から大きな声で話すことが苦手であり、なかなか直すことができなかった。しかし若林さんと話すうち、今後様々な人と関わる上で不可欠なことだと認識した。若林さんは、男と男の約束として、私に守るよう言った。「大声」の文字は、いわば決意表明のような形で書いたのである。若林さんは補聴器をつけておられ、小さな声量では声が届かない。また、私が今後関わる予定である山添村にも、お年寄りが多い。今考えれば、若林さんが教えてくださったことは、ただ大きな声を出すことだけでなく、相手と良い関係を築くには、気遣いの心を持って自分の想いを恐れず発信しろ、ということだと感じている。そのようなこともあり、大きな声で主体的に話すことを、これからの自分にとっての課題としたい。

祭りの当日と片付けで学んだことは、地域のために自ら行動することの重要性である。私たちは、町に灯籠を設置し、常に灯りを絶やさないように見て回った。天候が心配であったが、無事に最後までやり遂げることができ

た。印象的だったのは、地域住民の方々が主体的に灯火会の開催に協力し合っていたことである。灯籠の後始末等を率先して行う姿を目の当たりにし、地域の一体感を肌で感じる事ができた。

これは灯火会の後の講義で聞いたのだが、かつての今井町の住民は現在ほど主体的ではなかったようだが、若林さんらの努力によって少しずつ変わっていったそうだ。若林さんが長い時間をかけて勝ち取ったものは、非常に大きなものだったのだろう。

これまであまり今井町に関わりがなかった私もその輪の中に加わる事ができたと思っている。私は今井町という地域の関係人口になったのだと実感した。

7日に行われた祭りの片付けでは、行燈の解体作業にも取り組んだ。私は、事前準備に参加し大まかな流れを理解していたことで、他の仲間に指示を出す事ができた。ただ頭で理解するだけでなく、行動による経験を伴うことで、説明に説得力が生じる。他者からの賛同を得るには自らの行動が大事だと学べたことが、この日の成果である。

そうした経験を得たことで、地元への意識も大きく変化した。私が住む山添村でも地蔵盆などの地域の祭りが毎年行われている。私はそうした行事の準備等をこれまで何度も手伝ってきたのだが、協力に呼ばれたから行っているといった、どこか受動的な部分もあった。しかし、地域P&C養成塾の合宿を経験したことで、行事を行うことの意味や、それによってあるべき地域文化と人々を大切にしたいと心から思えるようになった。今後は主体的に行動し、地域に貢献したいと考えている。

今回の合宿で気づいた最も大きなことは、人々が関わり合うことの尊さである。それ故、私は将来的に人と人の交流を重要視した活動をしたいという考えに至った。これまで対人関係を築くことには苦手意識があった。しかしながら、誰かと共に活動することは楽しく、そして尊いことだと再認識したのである。

数年前から新型コロナウイルスが猛威を振るい、少しは緩和してきたが、依然として人々が集まることには様々な制約が設けられている。今年が私にとって初めての参加だったが、今回の灯火会は感染予防対策のこともあり、苦労したことも少なくなかっただろう。コロナ禍では、人間関係が希薄になったり、そもそも出会う機会が失われていることを、私たちは嫌というほど味わわれてきたのではないだろうか。そのような時代の中で、地域P&C養成塾という機会がなければ出会えなかったであろう様々な人々と語り、協力し合えたことは私の人生において大きな意味を持つ財産となった。

地域P&C養成塾はまだ続くが、今回の合宿は全体の中でもかなり大きな学びが得られると聞いており、本当にそうだったと感じている。現在でも私自身の今後の目標は漠然としたところもあるが、初日に比べると大きく前進しているという実感がある。

常に地域と向き合ってきた若林さんと約束したことは決して忘れることなく、私の心に残り続けるだろう。今後の活動の中でも、男同士の約束を胸に刻み、自分自身を高めていきたい。